

# アメリカのスマートシニア最前線

〈中〉「知縁」を求めてシニアが集う村



村田 裕之

Murata Hiroyuki

## ◆年450時間の講座受講が人気の 「ラッセル・ビレッジ」

アメリカでは退職者向けにリタイアメント・コミュニティという居住形態が発達しており、全米で1,100を超える数が建設されている。その中でもマサチューセッツ州ボストン隣のニュートンにあるラッセル・ビレッジは、きわめてユニークなものだ。

併設するラッセル・カレッジが運営するこのビレッジは、何と大学キャンパス内にあるリタイアメント・コミュニティ。2000年5月にオープンし、現在の入居者は210人で既に満杯。さらに100人が入居待ちという人気ぶりだ。

このラッセル・ビレッジには、従来のリタイアメント・コミュニティにない特長がある。第1に、入居者に年間450時間以上の講座受講を義務づけた全米初のリタイアメント・コミュニティであること。この時間数はカレッジの生徒とほぼ同じ。つまり、入居者は大学生並みに勉強する必要がある。このような義務を設けた背景は、ラッセル・カレッジの教育方針に加えて、土地利用の条件として生涯学習を絡めた住宅開発をニュートン市から強く要請されたことにある。

第2に、入居者はビレッジ独自の講座に加えて、ラッセル・カレッジの講座にも参加できること。たとえば「ミュージカル劇場」という講座では、アメリカ発祥のミュージカルの芸術性について若い学生と一緒に学ぶことができる。数あるリタイアメント・コミュニティの中で、若い学生との世代間交流を実施している例はほとんどなく、先進的だ。

入居者は、契約の際に支払う「入居費」と月々

に支払う「月間費」、「駐車場費」を負担する。入居費は、\$217,000～\$870,000。この費用の90%は退出時に払い戻される。月間費は、\$2,193～\$5,376。これらの費用に生活に必要なサービスは、ほとんど含まれる。また、入居者どうしの交流を促すカフェテリア、プール、フィットネスジム、サロン、ケーブルテレビ、高速ネットアクセス、市街地への交通手段などが完備されている。

入居者の年齢範囲は65歳から95歳までで、半数が4年生大学卒以上と高学歴だ。引退前の職業は、研究者、教師、医者、弁護士、実業家が多い。年収レベルは、いわゆるミドルアッパー層が大半だ。入居前の居住地は70%が10マイル（16キロ）以内。一般に、アメリカのリタイアメント・コミュニティの90%は、入居者が入居前に30マイル以内に住んでいる。

講座内容では、コンピュータ関連、音楽（演奏ではなく、背景の分析・解釈など）、フィットネス関連、言語、文学の人気の高い。また、カレッジとのレベルの差はほとんどない。したがって、予習を求められる場合も多い。また、希望により単位も取得できる。さらに、高い専門性をもつビレッジの入居者が講師役になることも多い。

## ◆アリゾナ大学の研究環境をフルに利用できる 「アカデミー・ビレッジ」

一方、アリゾナ州ツーソンは、先ごろ来日したポール・マッカートニーの家もあり、別荘地・観光地としても有名な所。今年の大リーグのゼネラル・マネージャー会議も行われ、前巨人の松井選手の行き先も大きな話題だった。そのツーソンの中心部から南西に車で30分ほど行くと、左手に大き

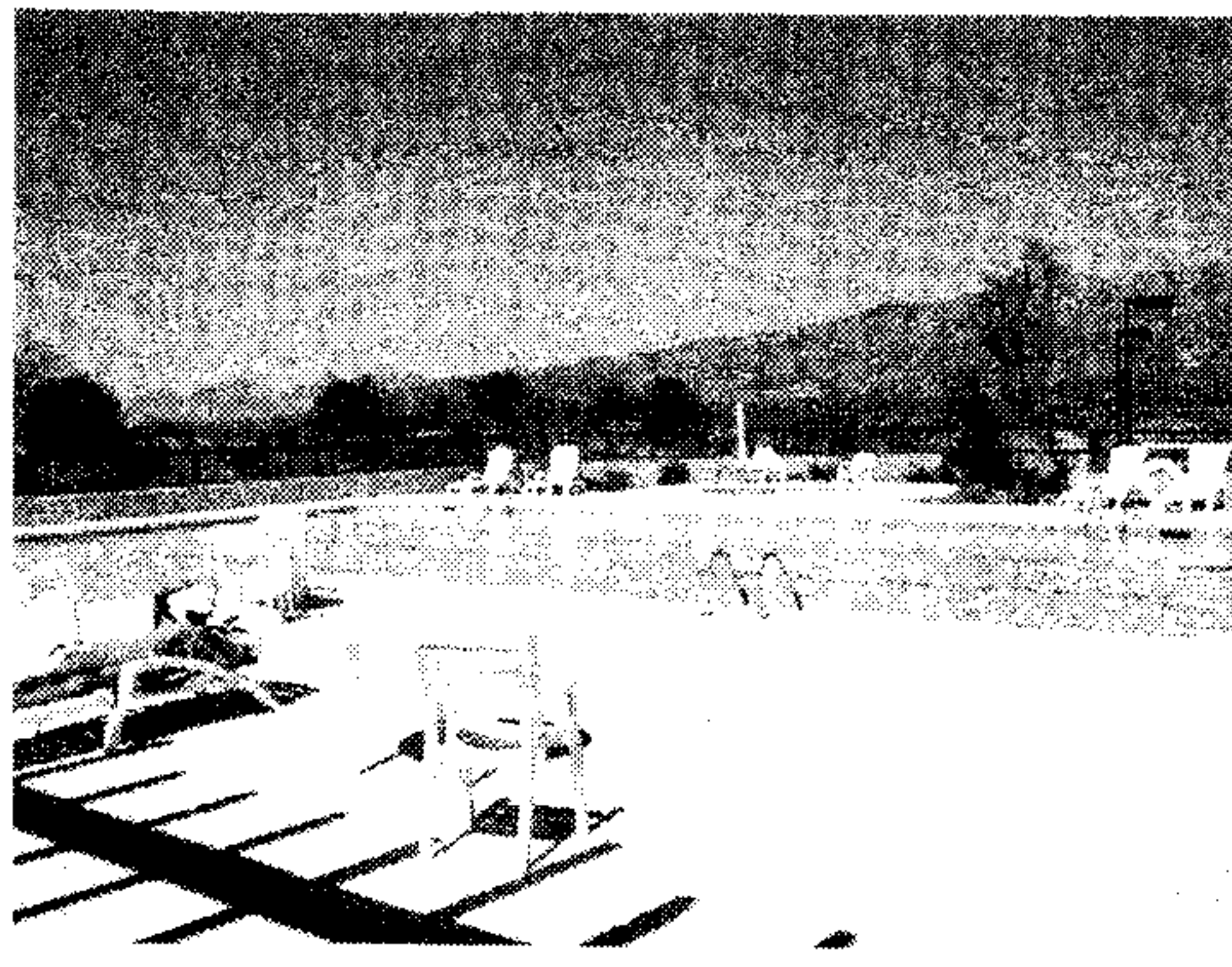
なアカデミー・ビレッジが現れる。

アカデミー・ビレッジは、94年にアリゾナ大学の元学長ヘンリー・コフラー氏により設立された。高度な専門知識や智恵をもつ優れた大学教授が退職するとその能力を発揮する場が全くなり、社会的な損失が大きい。この知的資産を学習意欲を持ったシニアに提供できないかと考えたことが設立の理由だ。当初、コフラー氏は、個人的につながりがある8千人にDMを出し、賛同者を呼びかけた。

アカデミー・ビレッジも既存のリタイアメント・コミュニティにないユニークな特長がある。第1に、アリゾナ大学との密接な連携により、リタイアしたシニアでも大学の研究環境を低額でフルに活用できること。たとえば、全米屈指の研究環境を誇るアリゾナ大学には雑誌だけでも2万7千冊あるが、そのうちの6千冊をオンラインで閲覧できる。通常、このように閲覧できるのは大学関係者のみだが、アカデミー・ビレッジの入居者にも、その権利が与えられている。入居者は、ビレッジにいながらにして、アリゾナ大学の図書館にいるのと同等の研究環境を得ることができる。

また、大会社に勤めていたある女性化学者は、退職と同時に研究施設からも退出を余儀なくされたが、アカデミー・ビレッジに来たおかげでアリゾナ大学の研究施設を使えるようになった。さらに、入居者は大学の図書館そのものやコンピュータールーム、スポーツ施設もフルに利用できる。

第2に、アカデミー・ビレッジの敷地内に「アリゾナ・シニア・アカデミー」という非営利の学習センターを併設し、経済学、詩の鑑賞、スペイン語などさまざまな学習プログラムを用意したこと。アリゾナ大学の教授以外に、アカデミー・ビレッジの入居者が講演することもしばしばある。というのは、ビレッジの入居者に大学教授や研究者出身の人が多く、なかにはノーベル物理学賞受賞者もいるほど知的レベルが高いからだ。妙に敷居の高いスーパーシニアたちの集まりのように聞こえるが、入居者たちは気さくで親しみやすく、素晴らしい人たちばかりだ。



上：アリゾナの自然と溶けこんだ「アカデミー・ビレッジ」  
右上：「ラッセル・ビレッジ」でコンピュータを操るシニアたち  
右：カレッジの若い学生との交流風景（「ラッセル」）



入居者は、分譲住宅を購入する。価格は、\$171,000～\$360,000とツーソンにしてはやや高めだが、家はかなり大きく、造りも豪華だ。また、敷地の真ん中にアリゾナ・シニア・アカデミーを含んだ共通施設があり、ラッセル・ビレッジ同様のサービスが完備されている。住宅購入コスト以外に共有施設費とアリゾナ・シニア・アカデミーへの参加費が、それぞれ月に\$275、\$100かかる。しかし、大学に正規に入学するのに比べれば破格の安さだ。

入居者の年齢範囲は58歳から90歳まで。退職前の職業は、半数が教授で、他に研究者、教師、医者、弁護士、実業家が多い。年収レベルは、やはりミドルアッパー層が大半。入居前の居住地については、ラッセル・ビレッジと異なり、全米各地に分散しているのが特色だ。特にウィスコンシンやワシントンDCなど北部の寒冷地からの移住が多い。

#### ◆なぜ、これらのシニア・ビレッジは人気があるのか？

どちらのビレッジでも、多くの入居者は、病気になり、動けなくなっても、そこに住み続けたいと思っている。何が入居者にとって魅力なのか。

まず、第1に、高いレベルの学習環境があることと共通の知的好奇心をもつ人々との交流が、単なる娯楽以上の喜びを生み出していることだ。シニアが入居するのは、学位がほしいからではなく、高いレベルの知的刺激を求めているからである。そして、そのような刺激を求めて集う人たちは、互いに共通の話題を持っている。そのような人々

との交流こそ、退職後に社会から疎遠になりがちなシニアが求めているものである。

第2に、大学との密接な連携の仕組みがあることで若い学生との交流が容易になることだ。ラッセル・ビレッジでは、学生との共同学習機会のみならず、学生に対する相談役としての活動も多い。若い世代から刺激を受ける一方、自分の人生経験が彼らの役に立つことが嬉しく、成長し続けられることが生きがいとなっている。

第3に、地理的にも市街地と隔離されておらず、開放的なことだ。一般にアメリカのリタイアメント・コミュニティは、人里はなれた山間部や砂漠の真ん中など、賑わいのある市街地から離れているものが多く、社会的な孤立感が強い。しかも、有名なサンシティなどは入居者を55歳以上に制限しており、このことが市街地の賑わいだけでなく、若い世代と隔離された感覚を一段と強めている。

一方、ラッセル・ビレッジの場合、全米屈指の文化都市ボストンに隣接するニュートンにあることが重要だ。筆者の質問に対し、入居者の1人は「ラッセル・ビレッジを選んだのは、私が通っている教会、かかりつけの医者、友人宅に近く、かつ、ボストンや都市の文化的な活動に容易にアクセスできる場所だから」と答えている。また、アカデミー・ビレッジのあるツーソンも、前述のとおり、市街地への移動は車で30分あれば可能で、かつ、観光名所や劇場なども多く、退屈しない。

#### ◆これからのシニアは

##### 「知縁型コミュニティ」を求める

リタイアメント・コミュニティの先鞭をつけたのは60年にアリゾナ州フェニックスにサンシティを建設したデルウェブ社である。デルウェブ社はその後、全米各地に17箇所のサンシティを展開し、その入居者数は合計10万人を上回り、「アクティブ・アダルト・コミュニティ」という居住形態を普及させた。

サンシティで最も重視されたものは太陽光線の多さと広いゴルフ場やシャッフルボード・コートなどのレジャー施設であった。しかし、このような従来型のリタイアメント・コミュニティに背を向ける人たちが最近増えている。実際、ラッセ

ル・ビレッジの入居者は次のように語っている。

「私たち夫婦はゴルフもテニスもしないので、南部に多くある従来型のリタイアメント・コミュニティには全く行く気がしなかった。また、私たちには子供がいないため、若い世代と交流する機会がほしかった。ラッセル・ビレッジの考え方は、ゴルフやテニスより生涯学習を求めている私たちの希望にぴったりだった」

AARP（全米退職者協会）の2001年の調査でも、ゴルフコースや太陽光線の多さはもはや退職者にとって優先順位が低い。かわりに、よい隣人関係や知的刺激のある環境が優先順位の上位に挙げられている。このような近年のシニアの「新しいニーズ」を先取りしたリタイアメント・コミュニティがここ数年いくつか出現している。今回取り上げたのは、その最も先進的なものだ。

2つのビレッジに共通するのは、入居者どうしが共通の関心事や分野で意気投合しやすい環境・雰囲気があることだ。つまり、どちらも高い学習意欲を持ち、自分と共通の知的好奇心をもつ人々とを結ぶ縁、つまり「知縁」つくりの場となっている。そして、これがシニアにとって終の棲家を選択する大きな理由になっていることが興味深い。

また、もう1つの共通点は、入居者の人たちが実際の年齢よりもはるかに若々しく、いきいきと生きていたことだ。知的刺激の多い生活を過すことで、高齢の人でも、いきいきと暮らせる。そのことに日米間で差はない。最近高齢者の鏡のような存在として人気の日野原重明さんは、執筆や講演活動などで2年先までスケジュールが埋まっているとのことだ。また、91歳を超えた現在も平均睡眠時間は4時間、階段は一段とびで上るほど元気である。

日本でも退職後に大学の公開講座などに通う人が増えている。これからいわゆる「リタイアメント」の年齢に近づく団塊の世代は、高齢になっても、これまでの高齢者より、さらに知的にもアクティブになるだろう。日本でもシニアの居住コミュニティを伴った大学が出現する日はそう遠くないかもしれない。

(村田アソシエイツ代表)